

新羅における初期金工品の生産と流通

諫早直人

- I. はじめに
- II. 問題の所在と本稿の視角
- III. 皇南大塚南墳出土品の彫金
- IV. 福泉洞1号墳出土金工品の彫金
- V. おわりに

要旨 新羅の金工品については、冠や大刀など器種ごとに緻密な型式学的研究が積み重ねられ、変遷や製作技法、地域性など多くのことが明らかにされてきた。しかしながら各種金工品がどのように生産され、流通し、最終的に被葬者の手元に渡り、副葬されたのかについては、不明な点が多い。本稿では、5世紀中葉の新羅王陵である慶州皇南大塚南墳、そして同時期の地方首長墓である釜山福泉洞1号墳から出土した金工品を対象に、器種を横断して認められる彫金技術、具体的には蹴り彫りや波状列点文などを観察し、新羅の初期金工品の生産と流通について予察を試みた。

まず皇南大塚南墳出土金工品の分析では、彫金の多様性を把握したうえで、膨大な金工品の製作に携わる複数の工房の存在を明らかにした。また技術水準の異なる複数の工人が同一工房で協業している可能性を指摘した。そして福泉洞1号墳の分析では、新羅の中央と地方から出土する金工品の間に厳然たる技術水準の格差が存在すること、地方においては他地域の金工品が流入し、服飾や飾馬に新羅王権の意図が必ずしも貫徹していたわけではなかったことをみた。最後に既往の写真や実測図では表現できない蹴り彫り、波状列点文の個性や技術水準の高低が、当該期の金工品の生産・流通を解明する基礎資料となることを論じた。

キーワード 新羅 金工品 彫金 生産・流通 皇南大塚南墳 福泉洞1号墳

I. はじめに

「まかがや眼炎こがねく金・銀・しろがねうるはしきいろ彩色、さは多に其の国に在り」、新羅のことである。『日本書紀』仲哀紀八年条に記されたその記事自体の信憑性はさておき、新羅における金・銀を用いた金工品の出現は慶州月城路カ-13号墳から4世紀後半にまで遡り¹、慶州では続く5・6世紀代の大型積石木槨墳からも大量の金工品が出土することからみて、記紀²の記述をまったくの虚言や後世の修辞として片づけてしまうのも問題であろう。文献による限り7世紀後半まで金銀の採掘された形跡の認められない倭にとって³、「黄金の国」新羅の金や銀、そしてそれらを用いた華麗な金工品は、たしかに憧憬の対象であったにちがいない。

問題は、それがいつまで遡るかである。金・銀の採掘遺跡や金工品の製作址は、新羅でも発見されてはいない⁴。金工品やその素材となる金・銀が容易に移動しうることを勘案すれば、流通の最終段階といえる墳墓に副葬された金工品を、何ら考証することなく新羅製という前提のもとに議論してしまうのは、たとえ慶州の大型積石木槨墳から出土したとしても危険であろう。「金銀錦繡を以って珍と為さず」という『三国志』魏書東夷伝韓条の記事や、原三国時代の辰韓と関連する考古資料の様相からみて、新羅（斯盧国）領域における金工品の普及が、周辺地域よりも大きく先行していたとみることは難しい。とりわけ、5世紀前半以前の初期資料に関しては、高句麗、あるいはより西方からの搬入品の可能性を十分考慮する必要があるだろうし、たとえ新羅でつくられたとしても、それは早くから金工品を製作していた中原およびその周辺（高句麗を含む）からの技術移転なくしては考えにくい。また、新羅の金工品生産は遅くとも5世紀中葉には軌道に乗ったとみられるが、その頃になると百済や加耶など隣接地域でも活発に金工品生産がおこなわれており、他地域からの搬入品の可能性が指摘されている資料もある。いずれにせよ、製作址の明らかでない現状においては、新羅の墳墓から出土した金工品がどこで生産されたのかという問いを解く鍵は、ひとえに金工品それ自体に対する検討に委ねられているのである。

本稿では、国立文化財研究所との共同研究の一環でおこなった調査成果をもとに、新羅における初期の金工品の生産と流通について考えてみたい。

II. 問題の所在と本稿の視角

1. 問題の所在

三国時代の金工品に関する研究の多くは、日本の古墳時代の金工品研究同様、器種ごとの型式学的研究である。今ここで、それらの研究史をひも解く余裕はないが、それらの研究の流れを大づかみに整理すると、形態や文様、装飾など‘かたち’を基準に分類していた段階から、製作技術や彫金など‘かたち’をつくりだす‘技術’にもとづいて、既存の分類

体系を再構築する段階へと移行しつつあるといえる。それと歩調を合わせるかのように出土古墳や相伴土器の年代観をそのまま金工品の年代にあてはめるのではなく、モノ自体の前後関係や併行関係が議論されるようになってきたのも近年の傾向であろう⁵。このような型式学的研究は、新資料の増加や既知の資料の再検討によって現在も更新され続けており、今後もより精緻なものへと発展していくことが予想される。

一方で金工品全体を見渡した研究は、李漢祥による一連の研究⁶を除くと、思いのほか少ない。氏の研究も、各種金工品に対する型式学的研究を基礎に、地域色の抽出や、地域間関係を鮮やかに描き出すことには成功したものの、金工品生産の実態についてはまだ十分な検討が及んでいない。後述するように併行する時期の日本列島から出土する各種金工品には、しばしば共通した技術的特徴が認められ、相互に密接な関係のもとに生産されたことが明らかとなりつつある。それは一つの工房、一人の工人が多種多様な金工品の製作に携わっていたことを意味する。もちろん、新羅においてもそうであったかどうかは、資料の実態にもとづいて判断すべきであろう。いずれにせよ新羅の金工品研究は、個々の金工品研究の蓄積をもとに金工品生産のあり方を具体的に議論する段階に来ている。

筆者は以前に、新羅の代表的な金工品の一つである装飾馬具の出現と展開について整理を試みたことがある。具体的には新羅が5世紀前半に、高句麗の装飾馬具の影響を強く受けながらも独自の形・意匠・素材の装飾馬具を創出する過程を明らかにすると同時に、それが冠や帯金具など服飾を構成する着装型金工品の生産開始とも密に連動している可能性を論じた⁷。当該期において服飾を構成する着装型の金工品は、その所有者の序列を可視化する重要な「威勢品⁸」であり、王権はその生産や流通を差配することによって、みずからの求心力の維持・拡大を図ったという理解が一般的である⁹。しかし、それらはあくまで副葬品という流通の最終段階から導き出された仮説であり、古墳に集積された各種金工品が生産され、被葬者の手に渡り、最終的に副葬されるまでのプロセスについては、ほとんどわかっていない。

2. 本稿の視角

製作址の明らかでない現状において、生産・流通という問題に迫っていくためには、一つ一つの古墳に集積された各種金工品間の関係性を丁寧に追究し、生産の単位を明らかにしていく、という基礎作業が必要不可欠である。この作業を進めていくうえで筆者が特に注目したいのが、各種金工品に用いられた彫金技術である。当該期の朝鮮半島や日本列島から出土する金工品、とりわけ金銅製品の中には、たがねによる蹴り彫りや点打ちといった彫金の施されたものが多くある。蹴り彫りの痕跡である三角文や、蹴り彫りや点打ちの連続からなる波状列点文の、かたちやたがねを打ち込むピッチには、工人・工房の保有する技術力やクセ、工具の違いが如実に反映される。

製品に刻み込まれた彫金技術を詳細に観察することによって工人・工房を峻別する試みは、日本では鈴木勉を中心に研究が蓄積しており¹⁰、筆者も鈴木と共に福岡県月岡古墳出土品の分析をおこない、古墳時代中期中葉に始まった初期金工品生産の一端を明らかにしたことがある。具体的には製品間相互の技術的關係にもとづいて、月岡古墳から出土した多様な金工品の中に、眉庇付冑の彫金技術と密接な関係が想定される一群と、関係が稀薄な一群の存在を見だし、前者については国産品の可能性が高いと結論づけた¹¹。

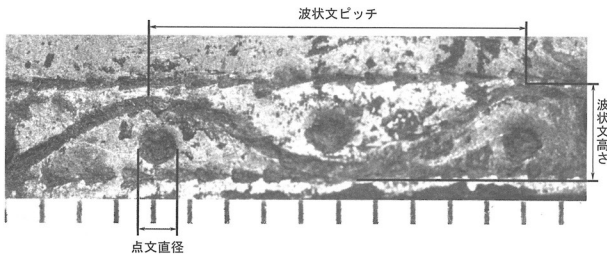
韓国においても新羅・加耶古墳出土金工品に対する権香阿による先駆的な研究があり、慶州皇南大塚南墳出土金工品を嚆矢とする特有の蹴り彫り類型が慶州地域に存在することや、異なる製品間の彫金に共通性がみられることなど、重要な指摘がなされている¹²。また最近では冠を中心に、彫金技術の詳細が観察可能な高倍率のカラー写真を掲載した図録や報告書が刊行されており¹³、今後ますます精緻な議論の展開が予想される。

本稿では以上のような問題意識と研究視角のもと、皇南大塚南墳と釜山の福泉洞1号墳から出土した金工品に対しておこなった調査の知見にもとづいて¹⁴、新羅における初期金工品の生産と流通について予察を述べたい。両例は新羅金工品の中でも初期の代表的な一括資料として知られ、前者は新羅の王陵、後者は地方の有力首長墓と、出土した古墳の性格が異なる。両者の彫金技術を比較することで、より多角的な視点から金工品生産の実態に迫ることが可能となろう。

3. 彫金技術を計測する

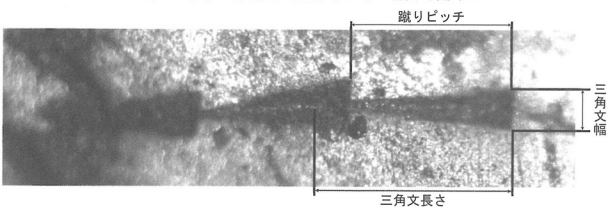
mm単位の微細な痕跡にもとづく本稿の議論に客観性を担保するのは、前稿¹⁵同様、高倍率の写真と彫金による加工痕跡の数値化である。以下、計測項目について簡単に説明しておきたい。

波状文 波状文の大きさは基本的に製品の大きさに左右されるため、波状文比という指数



第1図 波状列点文とその計測部位

にもとづいて比較する(第1図)。波状文比は(波状文高さ×波状文ピッチ)×100で算出される数値で、値が大きいほど高い波状文となる。



第2図 三角文とその計測部位

三角文 蹴り彫りたがねによる加工痕跡である。長さと幅を計測し、三角文縦横比(三角文長さ/三角文幅)を算出した(第2図)。値が大きいほど細長い三角文となる。蹴り彫り間隔を数値化するた

め、蹴りピッチ（三角文の底辺から次の三角文の底辺までの距離）を計測し、蹴り彫りのあらし（蹴りピッチ／三角文長さ）を算出した。値が大きいほど密な蹴り彫り、小さいほど粗い蹴り彫りとなる。なお、計測は直線部と曲線部に分けておこなった。

点文 点文たがねによる加工痕跡である。直径を計測した（第1図）。

これらの計測項目は基本的に前稿を踏襲しているが、前稿では計測数をできる限り増やし、平均値だけでなく標準偏差を求めたのに対し、本稿では平均値のみを求めた。いうまでもなく計測数は多ければ多いほど立論の信頼性は高まり、標準偏差を求めることによって数値のばらつきを議論することも可能となるが、紙面を媒体とする現行の方法では膨大な計測箇所を検証可能なかたちで提示できないという難もある。そこで今回は基本的に図示した写真内で計測をおこなうこととし、1資料あたりの計測箇所を波状文比は1点、蹴り彫り三角文と点文は3点に統一した（第3表）。計測数が少ないため、数値データはあくまで参考に留め、写真に依拠した議論となることをあらかじめご諒承いただきたい。

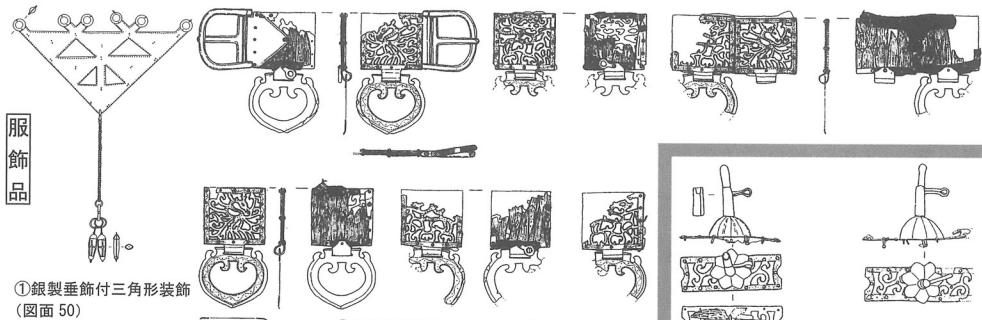
Ⅲ. 皇南大塚南墳出土金工品の彫金

1. 皇南大塚南墳出土金工品の概要とその意義

皇南大塚は慶尚北道慶州市に所在する大型積石木槨墳である。南墳と北墳からなる双円墳で全長約120m、高さ約23mをはかる。1973～1975年に文化財管理局文化財研究所によって発掘調査がおこなわれ、南墳が北墳に先行して築かれたことが明らかとなったほか、いずれの埋葬施設からも各種金工品を含む大量の遺物が出土した¹⁶。その規模からみてほとんどの研究者が新羅王（麻立干）とその夫人の墓とみるが、具体的にどの王に比定するかについては研究者間で意見の一致をみていない¹⁷。筆者は以前に皇南大塚南墳出土馬具に対して5世紀前葉～中葉という製作年代を与え、その被葬者については訥祇王（在位417～458年）の可能性が最も高いとみた¹⁸。

南墳からは埋葬施設（主副槨式木槨）を中心に2万点を超える遺物が出土しており、金工品だけでも2千点余りを数える。その品目も冠・耳飾・頸飾・指環・帯金具・飾履などの装身具類、装飾大刀・甲冑・胡籥などの武器・武具類と各種装飾馬具、容器類など実にさまざまである。その中でも注目されるのは、装飾馬具や帯金具など、一部の金工品の透彫の下に敷かれたおびただしい量の玉虫の羽である（第3図）。皇南大塚南墳を嚆矢とする新羅の玉虫装製品は、5世紀代においては慶州地域の、それも王陵級積石木槨墳からのみ出土する。皇南大塚南墳とほぼ同時期の古墳で玉虫装製品を副葬するのは皇南大塚北墳のみであり、まさしく最上位階層によって独占された金工品といえる。金工品の生産・流通という問題にひきつけるならば、次の2点も重要である。

一つ目は、素材となる玉虫の生息域の北限が、朝鮮半島東・南海岸沿いとみられること

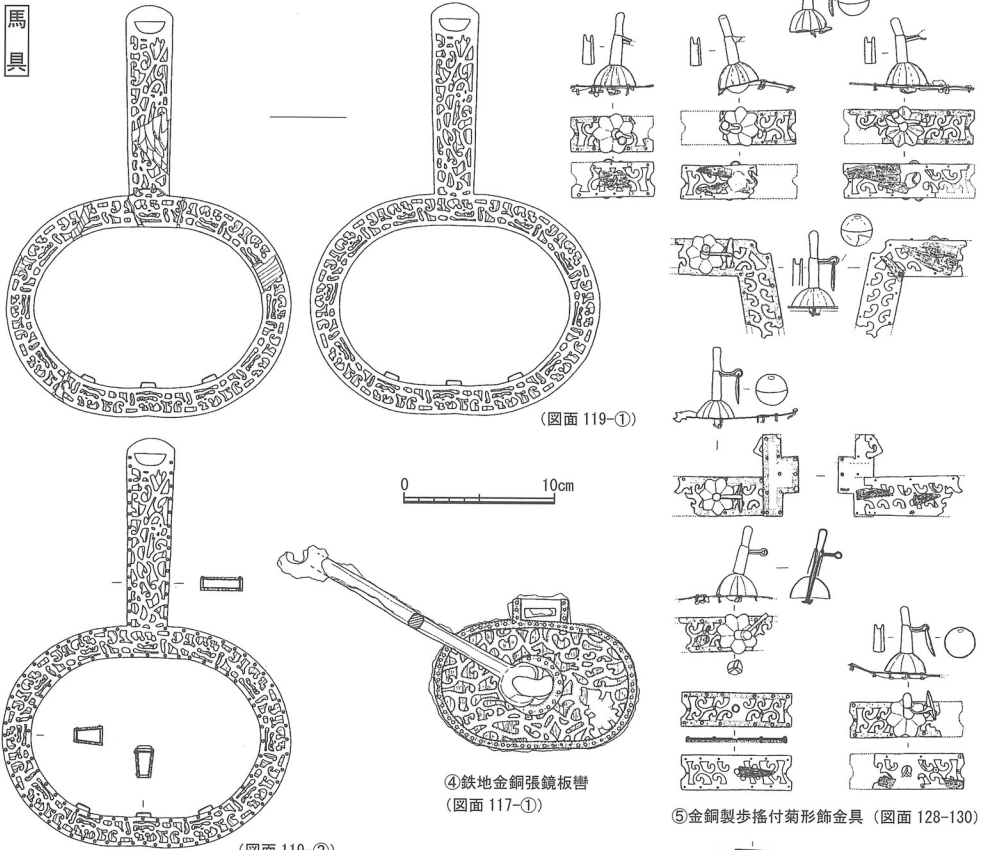


服飾品

①銀製垂飾付三角形裝飾 (圖面 50)

②金銅製帶金具 (圖面 44-①)

馬具



(圖面 119-①)

0 10cm

④鉄地金銅張鏡板轡 (圖面 117-①)

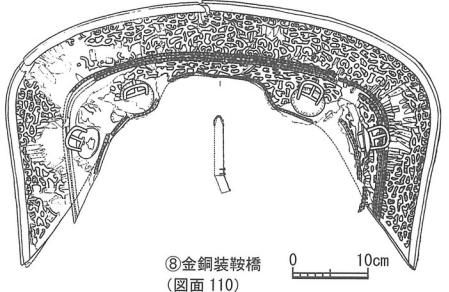
⑤金銅製步搖付菊形飾金具 (圖面 128-130)

③木心金銅板張輪鍔 (圖面 119-②)



⑥革地金銅張扁円魚尾形杏葉 (圖面 127-④)

⑦鉄地金銅張居木飾金具 (圖面 133-①)



⑧金銅裝鞍橋 (圖面 110)

0 10cm

第3図 皇南大塚南墳出土玉虫装金工品 (S=1/5、鞍橋と居木飾金具のみ S=1/10)

である¹⁹。この事実は、これらの玉虫装製品が高句麗ではなく、新羅でつくられた可能性を強く示唆する。もちろん玉虫の生息域が現在とは大きく異なった可能性や、素材自体が移動した可能性は考慮すべきであろうが、新羅においては玉虫装製品がその後6世紀代まで盛行するのに対し、高句麗での出土はまだ一例に過ぎず、その時期も新羅より遅れる²⁰。皇南大塚南墳出土金工品の中には高句麗的な要素が強いものも確かに存在するが²¹、最も華麗な装飾があしらわれた金工品が新羅製であるという事実は、新羅が遅くとも5世紀中葉には、高句麗に劣らない独自の金工技術をもっていたことを意味する。

ところで、大量に必要となる玉虫の羽が、より温暖で繁殖に適した日本列島からもたらされた可能性は、十分考慮されねばならない。ただ、樹枝形帯冠に取り付けられたヒスイ製の勾玉や、歩搖付飾金具の一部に用いられたイモガイ製の台座を考慮すれば、皇南大塚南墳出土金工品に日本列島からもたらされた素材が用いられていることは、さほど大きな

第1表 皇南大塚南墳出土の波状列点文の施された金工品

	製品名	用途	材質	備考	出典
主 塚	樹枝形帯冠	服飾	金銅	被葬者着装品	図面19
	樹枝形帯冠	服飾	金銅		図面20
	帯輪片	服飾	金銅		挿図18-④
	羽毛形帯冠	服飾	金銅		挿図19
	透彫装飾板付帽冠	服飾	金銅		図面30
	透彫装飾板付帽冠	服飾	銀	透彫装飾板は金銅	図面31-①
	玉虫装透彫帯金具	服飾	金銅		図面44-①
	胡篋金具	武具	金銅	報告書未掲載資料含む	図面48・49ほか
	帯先金具	不明	金銅		図面48
	透彫長方形金具	不明	金銅		挿図39
	扁円魚尾形杏葉	馬具	金銅	12点出土	図面62-⑥・⑦
副 塚	玉虫装透彫鞍橋	馬具	金銅	前・後輪出土	図面110
	玉虫装透彫居木飾金具	馬具	鉄金	2点出土	図面133-①・②
	居木飾金具	馬具	金銅	1点出土	図面133-④
	玉虫装透彫鏡板轡	馬具	鉄金		図面117-①
	透彫鏡板轡	馬具	鉄金		図面118-①・②
	鏡板轡片	馬具	鉄金		図面118-③・④
	素文心葉形杏葉	馬具	金銅	報告書の第I型式。6点出土	図面126-①・②
	三葉文心葉形杏葉	馬具	鉄銀	周縁板は金銅。報告書の第III型式。4点出土	図面126-⑦
	扁円魚尾形杏葉	馬具	鉄銀	周縁板は金銅製。報告書の第V型式。1点出土	図面126-⑧
	扁円魚尾形杏葉	馬具	鉄金	報告書の第VI型式。8点出土	図面127-①・②・③
	透彫扁円魚尾形杏葉(大)	馬具	鉄金	報告書の第VII式。2点出土	図面126-⑨・127-⑤
	透彫扁円魚尾形杏葉(小)	馬具	鉄金	報告書の第VIII式。1点出土	図面126-⑦
	玉虫装透彫扁円魚尾形杏葉	馬具	革金	報告書の第IX型式。10点出土	図面127-④
	玉虫装透彫扁円魚尾形杏葉	馬具	鉄金	報告書未掲載	国立中央博物館2010
	杏葉形異形装飾具	馬具	鉄銀	周縁板は金銅。3点出土	図面127-⑥~⑧
	玉虫装透彫長方形金具	馬具	金銅	歩搖付飾金具に伴う。216点出土	図面128~130
	方形留金具	馬具	金銅	10点出土	図面135-①
爪形留金具	馬具	金銅	30点出土	図面135-⑤・⑥	
封土	扁円魚尾形杏葉	馬具	金銅	23点出土	図面198-⑦

〔凡例〕

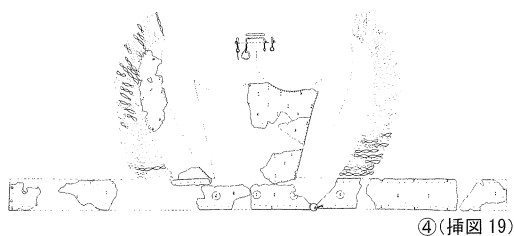
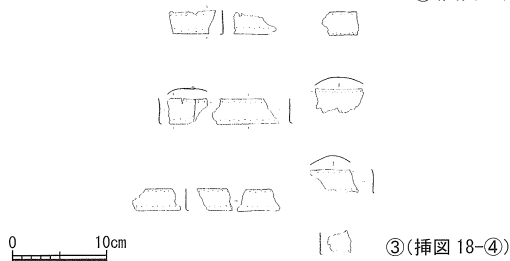
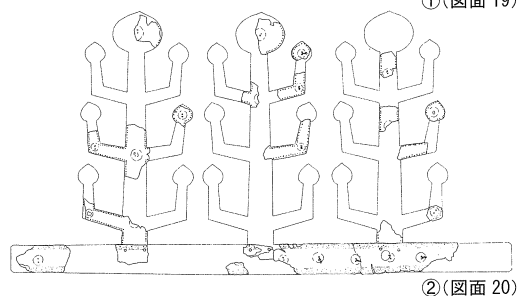
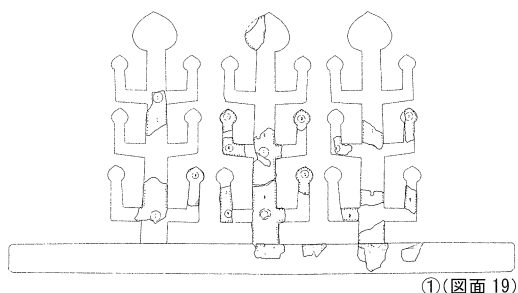
・鉄金：鉄地金銅張、革金：革地金銅張、鉄銀：鉄地銀張。

・太字は今回調査した資料。

・出典は（国立中央博物館『黄金の 나라 新羅の 王陵 皇南大塚』、2010年）以外すべて（文化財管理局 文化財研究所『皇南大塚（南墳）』、1993・1994年）。

問題ではない。そういった高句麗がアクセスしにくい素材を、金工品の装飾に積極的に取り入れていること自体に、新羅の独自性を見いだすべきだろう。

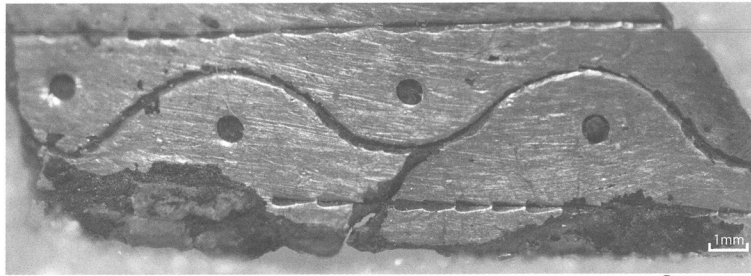
二つ目は、着装型金工品と装飾馬具が同じ意匠・素材でつくられていることである。両者の共通性は玉虫の羽の使用以外にも、金銅装や、龍文を基調とする透彫、波状列点文など多くの共通点が認められる。こういった共通性に加えて玉虫装の稀少性をふまえれば、両者は王のみに許された「装い」として、当初からセットで製作されたと考えるのが自然であろう。本例を通じて新羅の着装型金工品と装飾馬具の中に、同じ場面で用いることを前提として製作され、所有者の死に際して副葬される極めて属人性の高いものが存在することを、はっきりと認識できるのである。



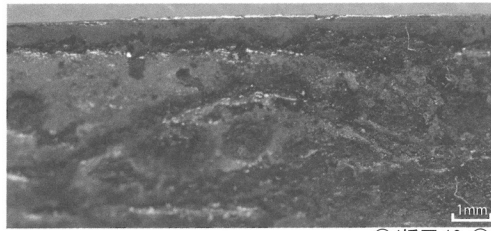
第4図 皇南大塚南墳出土波状列点文の施された帯冠 (S=1/8)

このように皇南大塚南墳に副葬された膨大な金工品の中で、少なくとも玉虫装の金工品については、新羅で製作された可能性が極めて高い。しかし、これはあくまで玉虫を前提とした議論であり、玉虫装以外の多くの金工品については、まだ十分な検討ができていない。今回注目する蹴り彫りや波状列点文は、より広範な器種間の比較を可能とすると同時に、玉虫装製品がどのような体制でつくられたのかを知る手がかりともなる。

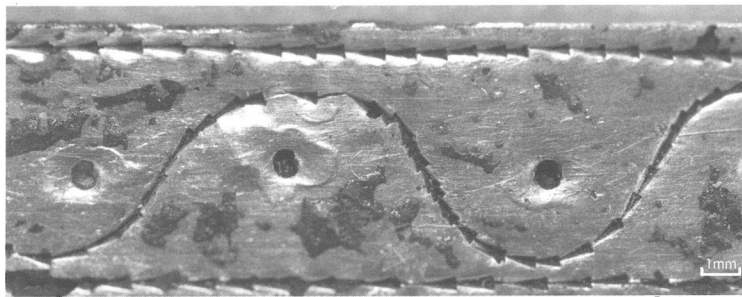
第1表は皇南大塚南墳出土金工品のうち、波状列点文の施された金工品を集めたものである。玉虫装製品は基本的に波状列点文が施されている。皇南大塚南墳からは表に挙げたほかにも耳飾や飾履、装飾大刀や容器類などの各種金工品が出土しているが、波状列点文の使用は一部の着装型金工品と装飾馬具に限定されていたことがわかる。着装型金工品は主槨から、装飾馬具は主に副槨から出土しているが、これは波状列点文を施さない着装型金工品や装飾馬具に関しても同様である。また波状列点文の施された金工品



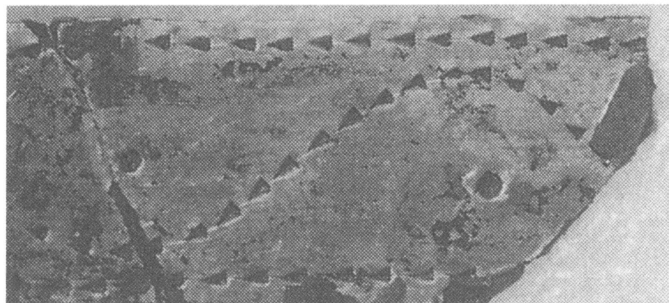
①(図面 20)



②(挿図 18-④)



③(挿図 19)



④参考資料(図面 19)

第5図 皇南大塚南墳出土帯冠の彫金
約5倍、④は縮尺不同

は、すべて金銅製品（複合素材製品の場合も金銅部分に施されている）であることにも注意したい。波状列点文は皇南大塚北墳では金冠や容器類などにも施文されるようになるが、当初は金銅製品、それも着装して用いるものに限定された文様であったとみられる。

なお波状列点文の施された金工品の中で、筆者が実際に調査しえたのは第1表の中でも太字で示した11品目に留まる。したがってこれから述べることも、あくまで現在までに実見した資料を中心としたものとなることを、あらかじめ断っておきたい。

2. 帯冠の彫金

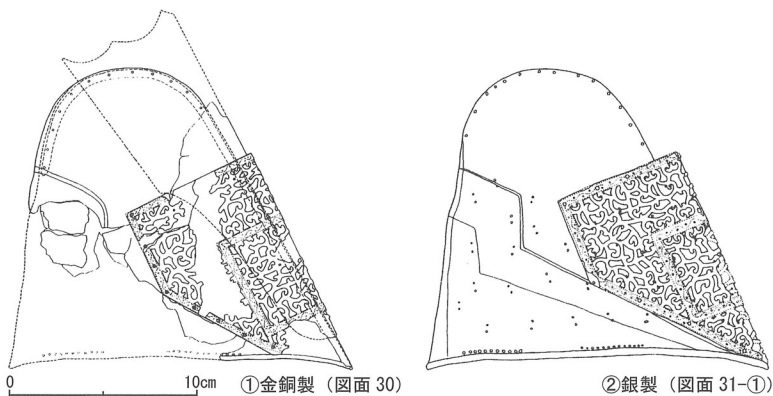
帯冠²²は樹枝形（出字形、山字形などとも呼ばれる）が金銅製6点（推定）、羽毛形が金銅製1点、銀製1点出土している。金銅製樹枝形帯冠の一つ（第4図-①）が木棺内で被葬者着装状態で出土したほかは、いずれも主槨副葬品収蔵部からの出土である。波状列点文は金銅製樹枝形帯冠2点（第4図-①・②）と金銅製羽毛形帯冠（第4図-④）、そして帰属の明らかでない帯輪破片（第4図-③）の計4点に認められ、いずれも帯輪部分に施文する。

今回調査をおこなった3点の波状列点文をみると、それぞれ全体形状が異なることがわかる（第5図、第3表）。また樹枝形帯冠（第5図-①）や帯輪破片（第5図-②）の蹴り彫りは、三角文と次の三角文を少し重ねながら、ほぼ一定のピッチで打ち込まれているのに対し、羽毛形帯冠（第5図-③）の蹴り彫りピッチは不安定で、三角文と三角文が大きく離れているところもある。三角文のかたちも、細かくみると樹枝形帯冠のみ長辺の一边が膨らんだ不等辺三角形（第5図-①）であるなど多様である。

なお、被葬者着装状態で出土した金銅製樹枝形帯冠（第4図-①）については今回調査できなかったが、権香阿によって撮影された写真から、幅に比して長さが短い三角文がそれぞれ少し間隔を空けながらほぼ一定のピッチで打ち込まれていることがみてとれる（第5図-④、第3表）²³。先にみた3点の彫金とは明らかに異なる、粗い蹴り彫りといえる。皇南大塚南墳出土の樹枝形帯冠については型式差が存在し、製作時期の異なるものが含まれていると考える意見が有力である²⁴。彫金の多様性は、製作時期が異なるかはさておき、これらが異なる工人によってつくられたことを強く示唆するものといえよう。

3. 帽冠の彫金

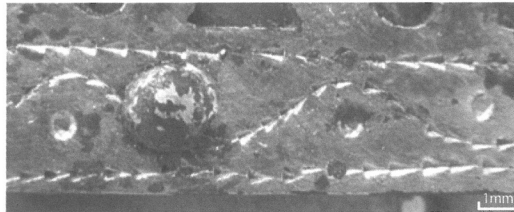
金銅製1点（第6図-①）、銀製1点（第6図-②）のほかに白樺製が3点出土している。いずれも主槨副葬品収蔵部から出土した。波状列点文は金銅製帽冠と銀製帽冠の前面に鈺



第6図 皇南大塚南墳出土帽冠 (S=1/4)



①金銅製（図面 30）



②銀製（図面 31-①）

第7図 皇南大塚南墳出土帽冠の彫金（約5倍）

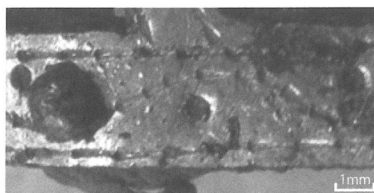
留された金銅製透彫装飾板に施文されている。どちらの蹴り彫りも基本的に三角文と次の三角文の間をわずかに離しながら、ほぼ一定のピッチで打ち込まれている（第7図、第3表）。また、幅に比して長さが短い三角文のかたちも、よく似ている。形態の特徴の類似に加えて、彫金の共通性をふまえれば、これらが同一工人の手によるものかどうかはなお一層の検討を要するとしても、少なくとも同一工房で製作された（彫金された）とみることは可能であろう。

4. 帯金具の彫金

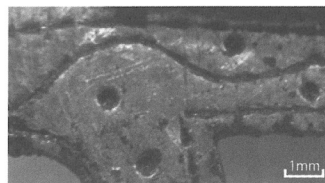
主槨木棺内から金製品が被葬者着装状態で出土したほか、銀製品5点、玉虫装透彫金銅製品1点（第3図-②）が主槨副葬品収蔵部から出土している。波状列点文は金製や銀製の帯金具にはみられず、金銅製の玉虫装透彫帯金具の銜板と垂飾にのみ施されている。どちらの蹴り彫りも、基本的に三角文と次の三角文が接するか接しないか程度のピッチで、ほぼ一定に打ち込まれていることがわかる（第8図、第3表）。また、細長い三角文のかたちや点文の大きさもよく似ている。ほかの金具も含めて個々の金具に施された彫金に大きな違いは認められず、一人の工人によって製作された（彫金された）とみて大過なからう。

5. 胡籐金具の彫金

報告書では一部について胡籐金具の可能性を指摘しつつも、「各種装飾具」として金具ご

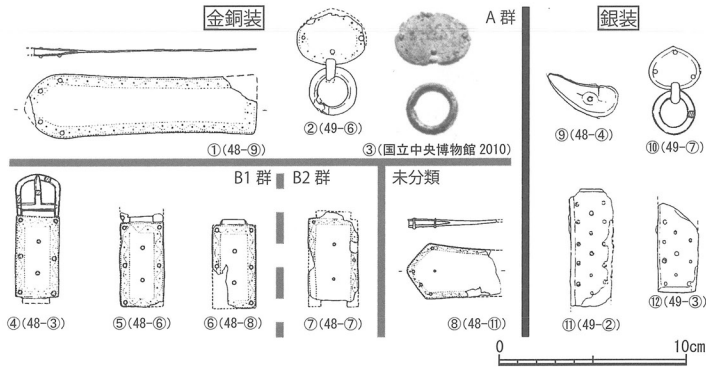


①銜板（図面 44 中段中）



②垂飾（図面 44 上段左）

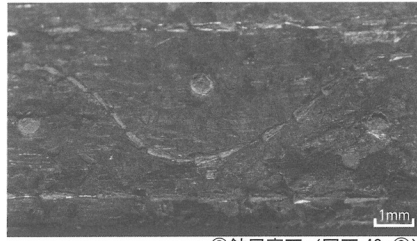
第8図 皇南大塚南墳出土玉虫装帯金具の彫金（約5倍）



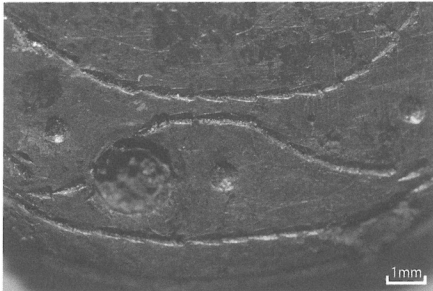
第9図 皇南大塚南墳出土胡籐金具 (S=1/4, ③は縮尺不同)



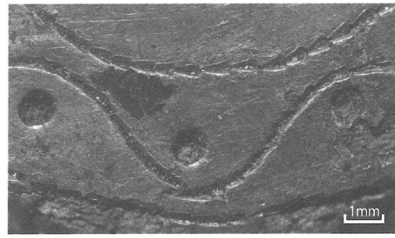
① 鉈尾表面 (図面 48-9)



② 鉈尾裏面 (図面 48-9)



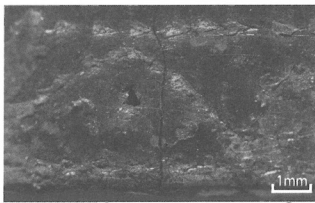
③ 鈔板 (図面 49-6)



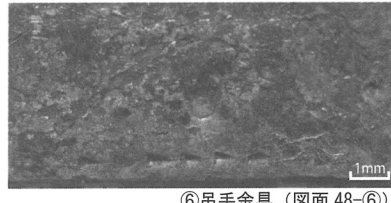
④ 鈔板 (国立中央博物館 2010)

A 群

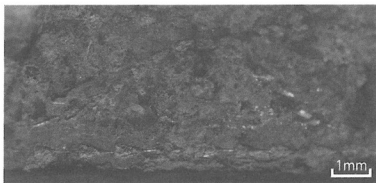
B1 群



⑤ 吊手金具 (図面 48-3?)

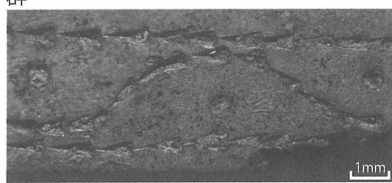


⑥ 吊手金具 (図面 48-6)



⑦ 吊手金具 (図面 48-8)

B2 群



⑧ 吊手金具 (図面 48-7)

第10図 皇南大塚南墳出土胡籐金具の彫金 (約5倍)

とに記載されている。いずれも主塚から出土したとみられるが、個々の金具の詳細な出土状況は明らかでない。土屋隆史は個々の金具の帰属については特に言及していないものの、2セット分の胡籙金具を想定している²⁵。逆心葉形銚板が2セット分確認されることから、筆者も金銅製と銀装²⁶の少なくとも2つの胡籙が副葬されたと考える（第9図）。彫金は金銅製胡籙金具にのみ認められる。

金銅製胡籙金具は彫金から2つに大別することが可能である。細長い三角文で、三角文と次の三角文を少し重ねるA群（第10図-①²⁷~④）と、三角文の長さが幅に比して短く、三角文同士を基本的に重ねないB群（第10図-⑤~⑧²⁸）である（第3表）。A群は帯金具、B群は吊手金具と、彫金の違いは用いられる部位と対応する。

B群は高く山なりの波状文をもつB1群と、低く滑らかな波状文のB2群に細分することができる。B1群の3点はいずれも幅が2.2cmであるのに対し、B2群の第9図-⑦は2.6cmと広いこと、それに対応して銚も前者は直径2.0mmほどであるのに対し、後者は直径1.5mmほどと小さいことから、彫金の微妙な違いは胡籙自体の違いと対応する可能性がある。一方、彫金自体は大きく異なるものの、A群の帯金具とB1群の吊手金具のいずれにも直径2.0mmほどの銚が用いられていることからみて、両者は同じ胡籙を構成した可能性が高い。

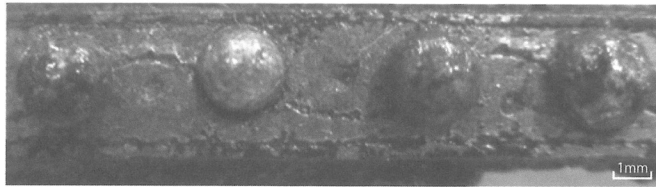
以上をまとめると、金銅装胡籙は吊手金具からみて複数個体存在する可能性がある。また、別々の工人によってつくられた（彫金された）とみられる吊手金具と帯金具が、銚からみて同一の胡籙を構成した可能性が高いことも明らかとなった。

6. 馬具の彫金

轡数からみて少なくとも8セットの馬具が副塚に副葬されていたが²⁹、波状列点文を施文するのは第1表に示した18品目である。今回分析するのは、玉虫装馬具（居木飾金具2点（第3図-⑦）、鏡板轡（第3図-④）、扁円魚尾形杏葉³⁰）と、鉄地金銅張透彫鏡板円形鏡板轡（第12図）である。いずれも鉄地金銅張で、金銅製の縁金部分に波状列点文を施している。

まずは同じ製品の部品間の彫金技術を比較してみよう。2点の玉虫装居木飾金具をみると、いずれも幅の狭い三角文で波状文比や点文直径もよく似ている（第11図-①・②、第3表）。たがねの形状は玉虫装居木飾金具とはまったく異なるものの、透彫鏡板轡の左右鏡板についても同様で、どちらも幅に比して長さが短い三角文がわずかに離れる程度のピッチでほぼ一定に打ち込まれている（第13図、第3表）。また、銜孔の周縁に取りつけられた縁金に施文されている波状列点文の蹴り彫りと、透彫金銅板に打ち込まれた蹴り彫りを比較すると、三角文のかたち、蹴り彫りピッチともによく似ている。以上からみて同一製品内の彫金は、基本的に同じ工具を使う同一工人が担当した可能性が高いといえよう。

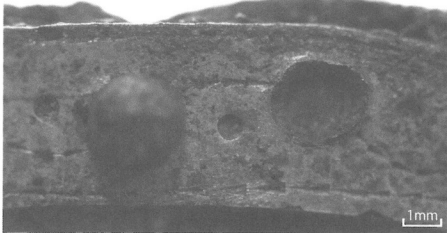
一方、玉虫装馬具の間ではどうであろうか。まず一見して、三角文自体のかたちがどれ



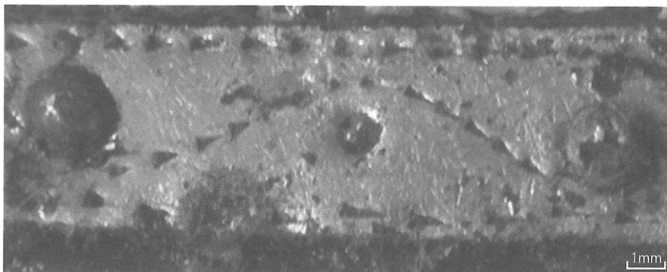
①玉虫装居木飾金具（図面 133-①）



②玉虫装居木飾金具（図面 133-②）



③玉虫装鏡板轡（図面 117-①）



④玉虫装扁円魚尾形杏葉（国立中央博物館 2010、174 頁）

第 11 図 皇南大塚南墳出土装飾馬具の彫金（1）（約 5 倍）

も異なることがみてとれる（第11図）。また、玉虫装居木飾金具の蹴り彫りは、三角文と三角文がわずかに接する程度のピッチではほぼ一定に打ち込まれているのに対し、玉虫装扁円魚尾形杏葉の蹴り彫りは三角文同士が離れたところが散見されるなど、粗い蹴り彫りである。玉虫装鏡板轡の蹴り彫りも杏葉ほどではないが、ピッチに若干の乱れが認められる。あくまで彫金だけに限定した議論ではあるが、鞍、鏡板轡、杏葉の順に彫金の技術水準³¹に格差が存在する。

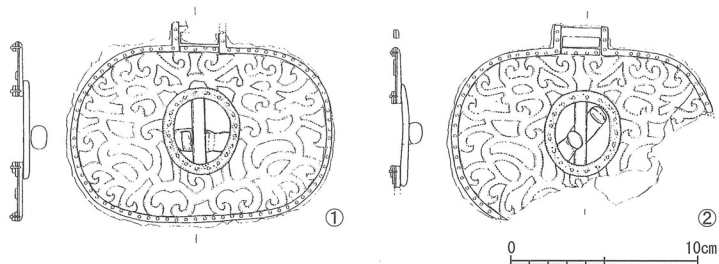
このように同じ製品の部品間については、玉虫装帯金具同様、同一工人による彫金が想定できるが、異なる製品間、すなわ

ち玉虫装馬具全体となるとその彫金には技術差が認められる。検討資料は十分ではないが、玉虫装馬具の製作に技術水準の異なる複数の工人が参加していたことは、確かであろう。

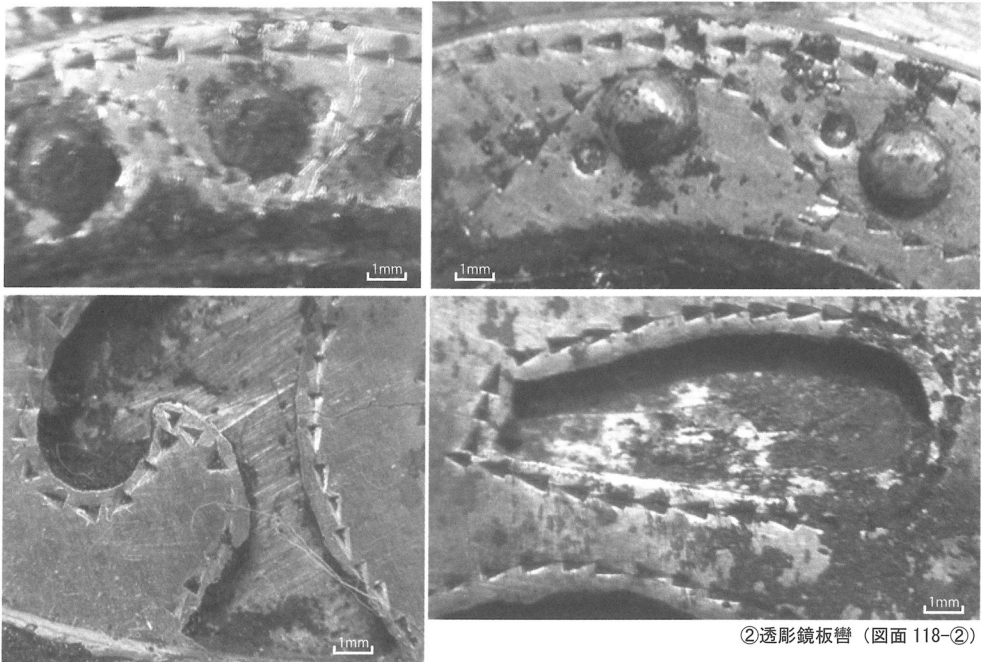
6. 小結

皇南大塚南墳出土金工品のいくつかに対する観察を通じて明らかとなったことは、次の3点に要約される。

第一は、彫金の多様性である。廃棄（副葬）の一括性が保証され、波状列点文という文様を共有する金工品間においても、その彫金は千差万別であった。既存の写真や実測図では議論できなかったその微細な差は、直接的にはたがねの形状やそれを金銅板に打ち込む角度やピッチに由来し、工人を識別する端緒となる。



第12図 皇南大塚南墳出土透彫鏡板轡 (図面 118-①・②) (S=1/4)



①透彫鏡板轡 (図面 118-①)

②透彫鏡板轡 (図面 118-②)

第13図 皇南大塚南墳出土裝飾馬具の彫金 (2) (約5倍)

第二は、同一製品の彫金は部品が違っていても基本的に同じであり、一人の工人によってつくられた(彫金された)とみられることである。これは、当該期における新羅の金工品生産を復元するうえで、最も基礎となる単位といえよう。

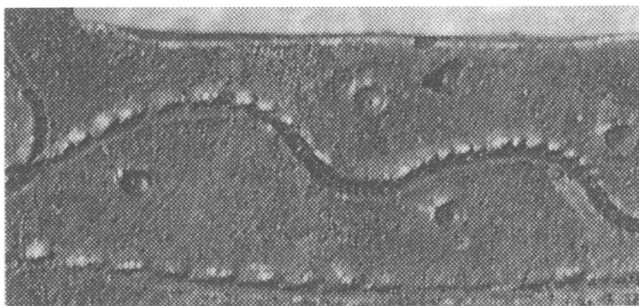
第三は、同じ場で用いることを目的として、当初からセットでつくられたとみられる製品間であっても、それぞれの彫金には差異があり、技術水準の異なる複数の工人によってつくられた(彫金された)とみられるものがあることである。このような違いは、意匠の共有、そして素材の調達という面からみて、基本的には同一工房内における変異として理解すべきであろう³²。玉虫装馬具間に見いだされた技術水準の格差は、鞍作工人が指導的な立場を担う当時の馬具づくりの現場を鮮明に甦らせる。

皇南大塚南墳の蹴り彫り金銅製品については、先述のように権香阿も詳細な検討をおこなっており、一部の資料を除き「強く鋭い三角蹴り彫りからなる共通点」をもつこと、そ

れが後続する皇南大塚北墳以降の金冠の彫金にも繋がっていく「慶州地域特有の蹴り彫り類型」であることなど重要な指摘がなされている³³。たしかに被葬者着装状態で出土した樹枝形帯冠（第5図-④）に代表される「強く鋭い三角蹴り彫り」は、たがねの細かな違いを捨象すれば、帽冠や胡籙金具B群、馬具の一部にも通じる特徴といえる。

ただ一方では、同じ帯冠でもまったく別の彫金が存在し（第5図-①）、細長い三角文を接するか接しないか程度のピッチで蹴り彫りする玉虫装製品のような彫金が一定量存在することも確かである。権が「皇南大塚遺物の蹴り彫り性向とはまったく異なる部類」と評価した三角文と三角文を密に重ねる金銅製素文心葉形杏葉も同じである（第14図）³⁴。このような多様性をふまえたうえで、あえて単純化を試みるのであれば、皇南大塚南墳から出土した波状列点文を施す金工品の彫金は、細長い三角文で、三角文と三角文を少し重ねるAグループと、三角文の長さが幅に比して短く、三角文同士を基本的に重ねないBグループの少なくとも二つに大別して理解するのが妥当ではなかろうか（第3表）。

両者の違いは技術水準の違いというよりは線彫りに対する意識・作業習慣の違いといえ、同時に5世紀前半における細やかな時間差が内包されている可能性もあるが、それを検討する紙幅はない。ここでは廃棄（副葬）の同時性が保証される一括資料であることを重視し、5世紀前半に新羅王権の膝下で金工品製作に携わった工房（製作集団）の違いとして把握しておきたい。権が目指す「慶州地域特有の蹴り彫り類型」を共有するBグループの工房は、あくまで皇南大塚南墳出土金工品を製作した主たる工房の一つとみるべきだろう。ただし複数の工房を想定する場合でも、工房を跨いで同じ形、同じ意匠の金工品がつくられていること、権が皇南大塚南墳の金工品に特徴的な加工痕跡と指摘する「三角文と



第14図 皇南大塚南墳出土素文心葉形杏葉の彫金（縮尺不同）

三角文を繋ぐ細線」³⁵が、多くの資料で確認できることなどをふまえれば（第3表）、発注者（王権）を同じくする各工房が相互に密接な関係にあったことは、改めて言うまでもない。

IV. 福泉洞1号墳出土金工品の彫金

1. 福泉洞1号墳出土金工品の概要

福泉洞1号墳は釜山広域市東萊区に所在する竪穴式石槨墓である。現存しないものの、本来は低平な墳丘をともなっていたものとみられる。1969年に東亜大学校博物館によって調査され、埋葬施設から各種金工品を含む豊富な副葬品が出土した³⁶。その年代について

は4世紀第4四半期から5世紀末まで多様な意見が提示されているが、筆者は福泉洞1号墳出土馬具に対して皇南大塚南墳出土馬具と併行する5世紀中葉という年代を与えている³⁷。

金工品は樹枝形帯冠、垂飾付耳飾といった服飾を構成するものと、馬装を構成する装飾馬具に大別される(第2表)。今回調査をおこなったのは樹枝形帯冠2点と装飾馬具である。樹枝形帯冠と垂飾付耳飾は遺骸に装着せずに被葬者の頭付近にそれぞれ置かれ、馬具類は被葬者の足元側に置かれていた。材質は多様で、服飾は金で彩られているのに対し、馬装は一部を銀で彩る。このように福泉洞1号墳には異なる色彩(材質)の着装型金工品と装飾馬具が副葬されていることにまず注意しておきたい。

2. 帯冠の彫金

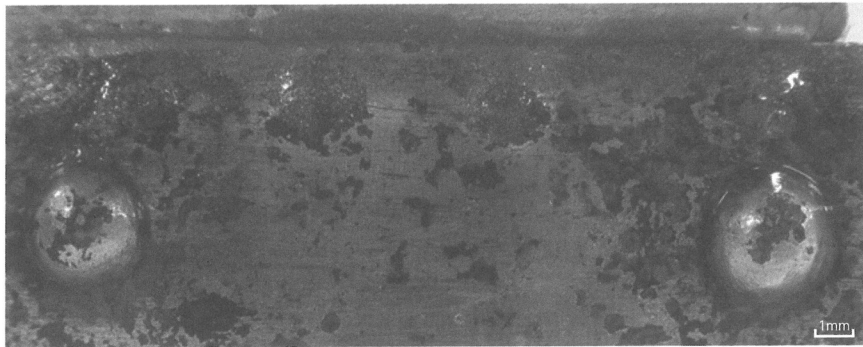
それでは、たがねによる彫金の認められる2点の金銅製樹枝形帯冠からみていく。帯冠①は波状列点文、帯冠②は打出し列点文と彫金は異なるものの(第15図・19-①・②)、咸舜變は両例をいずれもI型式群に位置づけ、皇南大塚南墳から出土した5点の樹枝形帯冠(II型式群)よりもわずかに先行して製作された初期の新羅冠とみる³⁸。ただし波状列点文の彫金された帯冠①の彫金を細かくみると、その波状文は滑らかな弧を描かず、「波状文」

第2表 福泉洞1号墳出土金工品

	製品名	材質	数量
服飾	樹枝形帯冠	金銅製	2
	垂飾付耳飾	金製	2
馬具	内彎楯円形鏡板轡	鉄地銀張	1
	瓢形杏葉	鉄地銀張	3
	板状別造辻金具	銅地銀張	6?

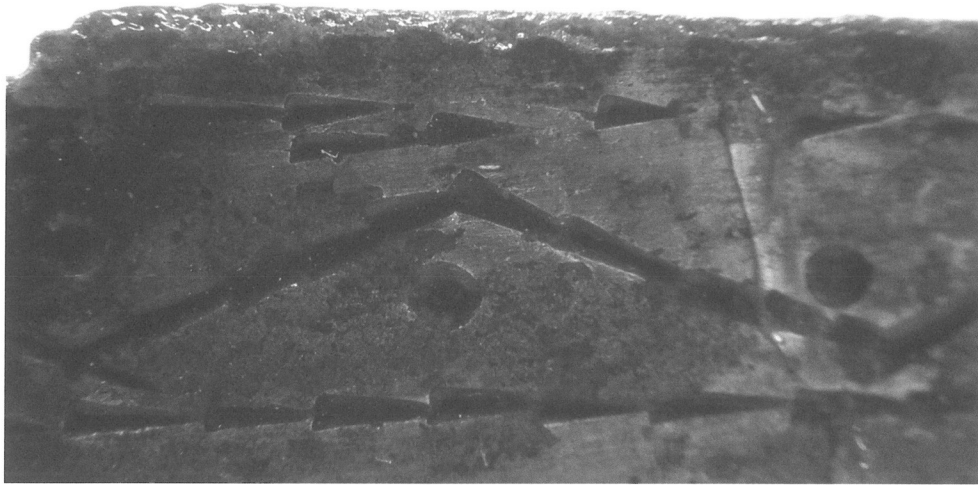


帯冠①



帯冠②

第15図 福泉洞1号墳出土帯冠の鋳と彫金 (約5倍)



第16図 福泉洞1号墳出土帯冠①の彫金（縮尺不同）



第17図 福泉洞10・11号墳出土帯冠の彫金（縮尺不同）

というよりは「鋸齒文」と呼ぶべきものであり、蹴りピッチも一定でない。また蹴り彫り線の一部に破綻が認められるなど（第16図）、先にみた帯冠をはじめとする皇南大塚南墳出土金工品と比べるとつくりが粗い点は否めない。三角文の大きさなどをみても、少なくとも皇南大塚南墳出土金工品の製作に携わった工人たちの作でないことは確かである。

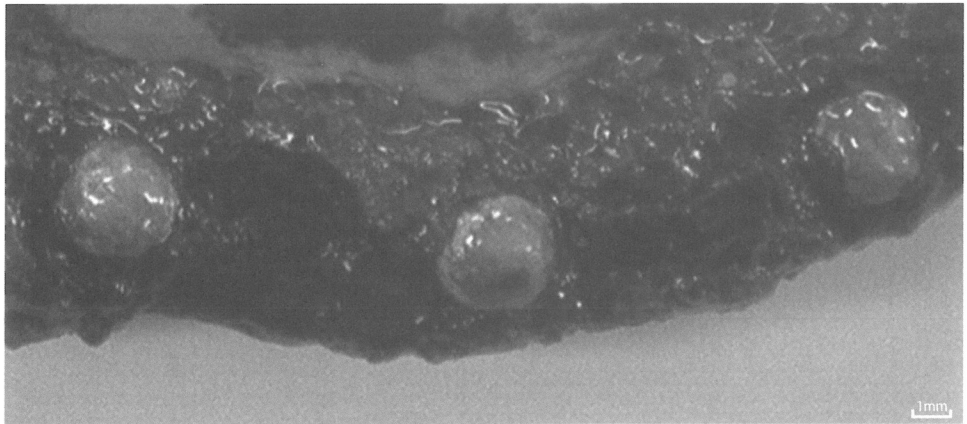
問題はその製作地である。当該期の金工品生産が王権によって独占されていたのであれば、この格差は慶州地域内の工房間の差として認識される。すなわち、精製品が王のためにつくられ、粗製品は地方に下賜されたとみることが可能である。一方で金工品生産が王権によって独占されていなかったのであれば、各地域が保有する工房の技術水準の差として把握することが可能である。

二者択一のようにみえるこの問題をさらに複雑にするのが釜山地域、福泉洞古墳群内における彫金の多様性である。たとえば福泉洞1号墳に先行する福泉洞10・11号墳出土樹枝形帯冠の彫金は、権香阿の提示する写真をみると明らかに1号墳、さらには皇南大塚南墳の被葬者着装状態で出土した帯冠よりも精緻であることがわかる（第17図）³⁹。資料調査が十分でない現状で答えを出すことは難しいが、新羅独特の形態的特徴をもつ樹枝形帯冠の製作は、少なくとも初期の段階においては、技術水準に差のある複数の工房でおこなわ

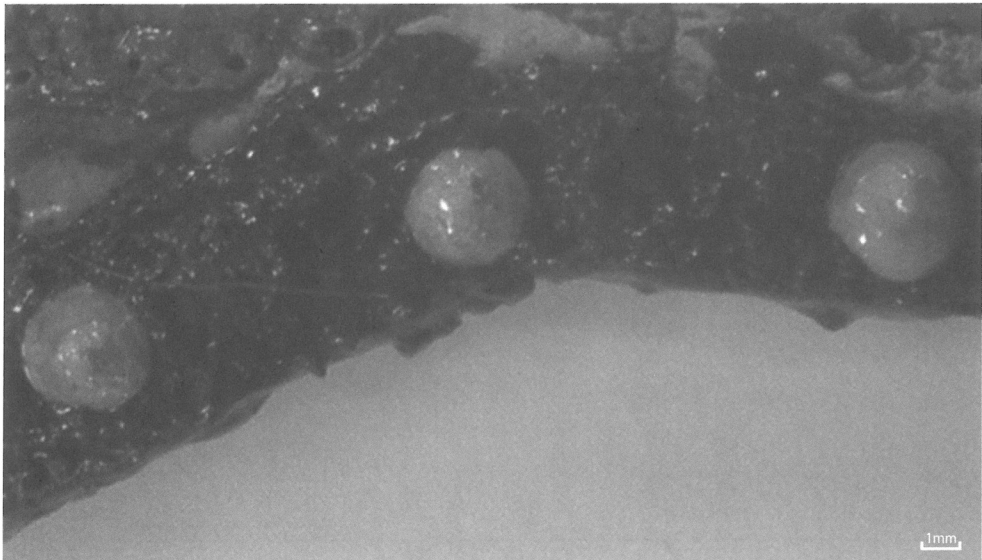
れたことを、ここでも再確認しておきたい。

3. 装飾馬具の製作地

装飾馬具については彫金が施されておらず、帯冠と直接比較することが難しいが、固定式遊環をもつ内彎楕円形鏡板轡（第19図-④）や、中央の方形金具に稜をもつ板状別造辻金具（第19図-⑥）といった装飾馬具は、新羅ではなく大加耶に類例がある⁴⁰。瓢形杏葉（第19図-⑤）については福岡県山ノ神古墳に類例があるのみで現状では位置づけが難しいが、用いられている銅製銀被鍍は直径3.0mm、高さ1.5~1.8mmで、内彎楕円形鏡板轡に用いられている鍍と同じ材質、同じ大きさである（第18図）。同じ意匠、同じ鍍が用いられているこれらの馬具は、当初から同じ馬装に用いることを意図して製作されたものとみられる。全体に銀で統一されたこれらの装飾馬具は、セットで（おそらくは馬とともに）大加耶から



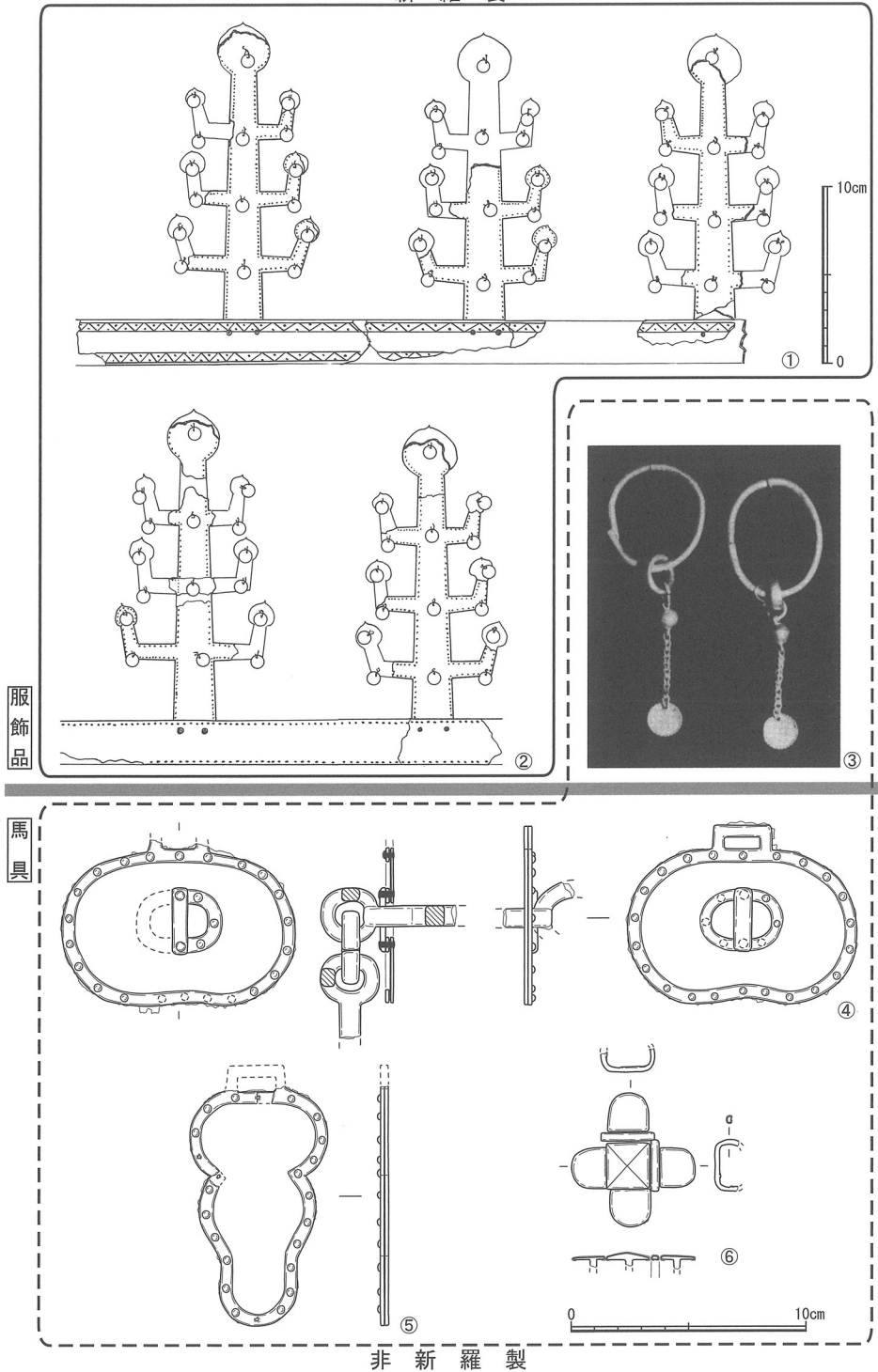
鏡板轡



杏葉

第18図 福泉洞1号墳出土装飾馬具の鍍（約5倍）

新羅製



第 19 図 福泉洞 1 号墳出土金工品 (①・②: S=1/4, ④~⑥: S=1/3, ③は縮尺不同)

もたらされた可能性が高い。

4. 小結

以上を整理すると、新羅製の帯冠を被り、大加耶製の装飾馬具を装着した飾馬に騎乗する被葬者の姿が浮かびあがってくる（第19図）。長鎖式の金製垂飾付耳飾（第19図-③）は百済・大加耶に系譜が追えるようであり⁴¹、また把の意匠からみて倭製とみられる鹿角装鉄剣が共伴するなど⁴²、服飾自体の由来も多様であったようである。福泉洞1号墳からは新羅様式土器が主体的に出土しており、釜山地域自体、福泉洞1号墳よりも以前から新羅王権の影響下に入っていたとみるのが一般的である⁴³。ただ、新羅で製作された金工品と新羅以外で製作された金工品の両方を入手しえたことからみて、釜山地域は福泉洞1号墳の時期においても、ある程度独自に対外交渉をおこなうことができたものとみられる⁴⁴。外部から入手した金工品を「装い」の中に取り入れ、それを生時や葬送の場で用いることは、外部世界との繋がりや新羅王権に対する自立性を可視的に示す効果があったのであろう。

V. おわりに

本稿では新羅の初期金工品の中でも、皇南大塚南墳と福泉洞1号墳という二つの古墳から出土した金工品に注目し、それぞれの彫金について検討をおこなった。前者の分析からは、新羅王陵から出土する膨大な金工品の製作に携わる、複数の工房の存在を垣間見ることができた。これまでの金工品研究は器種ごとの型式学的研究を精緻化することに多くの時間を割いてきた。その営為自体を否定するつもりは毛頭ないが、今回の分析結果から冠工房、馬具工房といった単一器種のための製作に従事する工房を想定することは難しい。本稿で結論を出すことはできなかったが、工人・工房の実態や各工房間の関係を復元するためには、既往の型式学的研究の成果を、彫金技術など器種を横断する新たな視点から相対化していく作業が必要不可欠であることは、示せたのではなからうか。

また後者の分析からは、ほぼ同時期の中央と地方の古墳から出土した樹枝形帯冠の技術水準に、厳然たる格差が存在することを認めた。この違いが何に由来するかを明らかにするためにはさらに類例を調査していく必要があるが、新羅独特の冠とされる樹枝形帯冠が、王権膝下の工房で一括生産され、各地に分配されたという既往の有力なモデルに一定の見直しを迫るものであると考える。また地方においては他地域の金工品が流入し、服飾や飾馬に新羅王権の意図が必ずしも貫徹していたわけではなかったことも、当該期における金工品の生産・流通、ひいては中央と地方の関係を考える重要な視点とならう。

個別具体的な事象の羅列に終始した感があるが、同じ蹴り彫り、同じ波状列点文から浮かび上がる個性、そして技術水準の高低は、当該期の金工品生産を復元するための基礎資料となることを、最後にもう一度強調しておきたい。「黄金の国」新羅の金工品生産を解明

第3表 計測値一覧

計測資料	図番号	分類	波状 文比	直線部					曲線部					点文 直径	細 線		
				三角文			蹴り ピッチ	蹴り彫 りのあ らさ	三角文			蹴り ピッチ	蹴り彫 りのあ らさ				
				長さ	幅	縦横比			長さ	幅	縦横比						
皇南大塚南墳																	
帯冠	樹枝形帯冠	図5-①	A	22	1.23	0.31	3.97	1.04	0.85	0.94	0.29	3.24	0.71	0.76	0.69		
	帯冠片	図5-②	A	19	0.94	0.37	2.54	0.88	0.94	0.70	0.35	2.00	0.43	0.61	1.22		
	鳥羽形帯冠	図5-③	B	34	0.85	0.35	2.43	1.32	1.55	0.81	0.36	2.25	0.98	1.21	0.76	○	
	樹枝形帯冠 (参考資料)	図5-④	B	38	—	—	1.84	—	1.61	—	—	1.40	—	1.63	—		
帽冠	金銅製帽冠	図7-①	B	22	0.52	0.26	2.00	0.76	1.46	0.56	0.29	1.93	0.62	1.11	0.47	○	
	銀製帽冠	図7-②	B	24	0.73	0.42	1.74	0.78	1.07	0.58	0.36	1.61	0.63	1.09	0.71	○	
帯金具	玉虫装帯金具 (鈎板)	図8-①	A	19	0.93	0.23	4.04	1.10	1.18	0.85	0.26	3.27	0.9	1.06	0.65	○	
	玉虫装帯金具 (垂飾)	図8-②	A	21	0.76	0.29	2.62	0.85	1.12	0.81	0.26	3.12	0.72	0.89	0.52		
胡線金具	A群: 蛇尾 (表面)	図10-①	A	26	1.01	0.32	3.16	0.98	0.97	0.86	0.27	3.19	1.02	1.18	0.65	○	
	A群: 蛇尾 (裏面)	図10-②	A	28	0.98	0.26	3.77	1.42	1.45	0.80	0.25	3.20	0.98	1.23	0.52	○	
	A群: 鈎板	図10-③	A	17	0.93	0.31	3.00	0.88	0.95	0.92	0.30	3.07	0.80	0.87	0.69		
	A群: 鈎板	図10-④	A	42	0.82	0.34	2.41	0.66	0.81	0.85	0.31	2.74	0.60	0.71	0.96		
	B1群: 吊手金具	図10-⑤	B	28	0.79	0.37	2.14	1.07	1.35	0.59	0.34	1.74	0.59	1.00	0.52	○	
	B1群: 吊手金具	図10-⑥	B	29	0.68	0.38	1.79	0.88	1.29	0.66	0.35	1.89	0.95	1.44	0.55	○	
	B1群: 吊手金具	図10-⑦	B	27	0.69	0.36	1.92	0.94	1.36	0.64	0.29	2.2	0.72	1.13	0.54	○	
	B2群: 吊手金具	図10-⑧	B	22	1.01	0.42	2.40	1.29	1.28	0.88	0.41	2.15	0.89	1.01	0.55	○	
	馬具	玉虫装居木飾金具	図12-①	A	17	0.68	0.27	2.52	0.86	1.27	0.63	0.29	2.17	0.63	1.00	0.60	
		玉虫装居木飾金具	図12-②	A	18	0.75	0.31	2.42	0.85	1.13	0.66	0.32	2.06	0.75	1.14	0.73	○
玉虫装鏡板轡		図12-③	A	22	0.91	0.32	2.84	1.05	1.15	0.74	0.26	2.85	0.69	0.93	0.68	○	
玉虫装扁門魚尾形杏葉		図12-④	A	19	1.06	0.37	2.87	1.64	1.55	0.73	0.41	1.55	1.15	1.58	1.01	○	
透影鏡板轡① (緑金)		図13-①上	B	22	0.88	0.46	1.91	1.14	1.30	0.64	0.43	1.49	0.91	1.42	0.88	○	
透影鏡板轡① (透影板)		図13-①下	B	—	0.82	0.43	1.91	0.97	1.18	0.67	0.53	1.26	0.88	1.31	—		
透影鏡板轡② (緑金)		図13-②上	B	34	0.89	0.46	1.93	1.12	1.26	0.80	0.46	1.74	0.96	1.20	0.90	○	
透影鏡板轡② (透影板)		図13-②下	B	—	0.94	0.44	2.14	1.18	1.26	0.91	0.43	2.12	0.89	0.97	—		
	素文心葉形杏葉 (参考資料)	図14	A	22	—	—	3.44	—	1.10	—	—	1.99	—	0.61	—	○	
福泉洞1号墳																	
	樹枝形帯冠	図15-①	—	37	2.23	0.63	3.54	2.39	1.07	2.15	0.72	2.99	1.67	0.77	1.18		
福泉洞10・11号墳																	
	樹枝形帯冠 (参考資料)	図17	—	20	—	—	4.77	—	1.35	—	—	3.89	—	0.85	—	○	

〔凡例〕
 ・計測項目、計測位置などについては(諫早直人・鈴木勉「古墳時代の初期金銅製品生産—福岡県月岡古墳出土品を素材として—」『古文化談叢』第73集、九州古文化研究会、2015年)に準拠した。なお波状文比は1ヶ所、そのほかは3ヶ所を図上に任意に計測した平均値である。
 ・三角文長さ・幅、蹴りピッチ、点文直径の単位はmm。
 ・波状文比=(波状文高さ/波状文ピッチ)×100。蹴り彫りのあらさは蹴りピッチ/三角文長さ。
 ・細線は「三角文と三角文を繋ぐ細線」を確認できたものに○を付した。
 ・参考資料については(権香阿「三国時代 金属遺物の線影技法 線相」『文物研究』第4号、東아시아文物研究学術財団、2000年)の各図より計測した。

する手がかりは、まだ製品の中に残されている。

謝 辞 本稿を草するにあたり下記の方々、各機関には大変お世話になりました。とりわけお忙しい中、調査に随行いただいた国立文化財研究所の李恩碩先生、朴晟鎮先生、そして資料調査と写真・図面の掲載にご協力くださった国立中央博物館、国立慶州博物館、国立金海博物館の諸先生には、改めてこの場を借りて謝意を表します。なお本稿にはJSPS 科研費26770276の成果を一部含む。

李恩碩 李姪恩 李漢祥 李妍宰 金宇大 金奎運 金大煥 金赫中 権香阿 鈴木勉
 土屋隆史 朴晟鎮 朴洪国 柳廷翰 国立慶州博物館 国立金海博物館 国立文化財研究所 国立中央博物館

註

1 李漢祥『黄金의 나라, 新羅』김영사、2004年。月城路カ-13号墳からは、耳飾や頸飾などの装身

- 具類、装飾大刀や胡籬などの武器・武具類、装飾馬具、金製・銀製の容器類など多種多様な金工品が出土している（国立慶州博物館・慶北大学校博物館『慶州市月城路古墳群』1990年）。
- 2 『古事記』仲哀天皇段にも「西の方に國有り。金銀を本として、目の炎耀く種種の珍しき寶、多に其の國に在り」という記述がある。
 - 3 文献に記された金・銀採掘の初出史料は下記の通りである（小林行雄『古代の技術』塙書房、1962年）。銀：『日本書紀』天武天皇三年（674）「三月庚戌朔丙辰、对馬国司守忍海造大国言、銀始出于当国、即貢上。由是大国授小錦下位。凡銀有倭国、初出于此時、故悉奉諸神祇、亦周賜小錦以上大夫等。」金：『続日本紀』文武天皇五年（701）「戊子、遣追大肆凡海宿禰鹿鏝于陸奥治金」「甲午、对馬嶋貢金。建元为大宝元年。」
 - 4 韓炳三は、現在の慶州やその周辺に金鉱がないことなどから、金素材を外部から輸入したとみる（韓炳三『韓国の古代文化』日本放送出版協会、1995年、p.99）。これに対し李漢祥は、朝鮮時代や植民地期に、後代に慶尚北道尚州一帯などで金が採掘されていることに注目し、三国時代にまで遡る可能性を指摘している（李漢祥『黄金의 나라, 新羅』（前掲註1）、pp.60-62）。また最近、慶州およびその周辺の河川で砂金が採取できることが朴洪国によって明らかとなり、今後の展開が注目される（朴洪国「新羅 黄金에 대한 小考—慶州 및 隣近 地域에서 採取한 砂金を 중심으로—」『威徳大学校 博物館 叢書』第5冊、威徳大学校博物館、2014年）。
 - 5 たとえば馬具研究においては、当初は型式学的研究と並行して新羅・加耶などの地域色を明らかにすることや（金斗喆「新羅와 加耶의 馬具—馬裝을 中心으로」『韓国古代史論叢』第3輯、駕洛國史跡開発研究院、1992年。金斗喆「三国時代 轡의 研究」『嶺南考古学』第13号、嶺南考古学会、1993年など）、出土古墳の年代観を軸に地域ごと・古墳群ごとの出土馬具の変遷を確立することに主眼が置かれていたが（申敬澈「加耶 初期馬具에 대하여」『釜山大学校史学会、1994年。柳昌煥「大伽耶國 馬具의 變化와 画期」『鶴山金廷鶴博士頌壽紀念論叢 韓国 古代史와 考古学』学研文化社、2000年など）、最近では広範な地域を横断して認められる技術的な特徴にもとづいて広域編年や製作年代が議論されるようになってきた（張允禎『古代馬具からみた韓半島と日本』同成社、2008年。諫早直人『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣、2012年など）。
 - 6 李漢祥『黄金의 나라, 新羅』（前掲註1）。李漢祥『東아시아 古代 金属製 装身具文化』考古、2011年など。
 - 7 諫早直人「洛東江以東地方における馬具生産の展開とその特質」『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣、2012年。
 - 8 韓国考古学で用いられている「威勢品」は「prestige goods」の訳語であり、それに対応する日本考古学の用語は「威信財」である。李熙濬は威勢品を容器類などの「保有型威勢品」と、服飾の一部を構成する「着装型威勢品」に大別し、後者について「基本的に特定の着装者のために製作され」、「着装者の身分を恒常的に示すと同時に、支配階層内における位階を具体的に表すもの」とみた（李熙濬『新羅考古学研究』社会評論、2007年、p.77）。これは日本でもしばしば混同されがちだが、「威信財」よりは「身分標識（表徴財、status symbol）」に近い概念である（内山敏行「鉄器副葬の性格を考えるための視点」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会、2000年）。
 - 9 李漢祥「5～6世紀 新羅의 辺境支配方式」『韓国史論』33、서울大学校国史学科、1995年。李熙濬「4～5世紀 新羅古墳 被葬者の 服飾品 着裝 定型」『韓国考古学報』47、韓国考古学会、2002年など。
 - 10 勝部明生・鈴木勉『古代の技 藤ノ木古墳の馬具は語る』吉川弘文館、1998年。鈴木勉『ものづくりと日本文化』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、2004年など。
 - 11 諫早直人・鈴木勉「古墳時代の初期金銅製品生産—福岡県月岡古墳出土品を素材として—」『古文

- 化談叢』第73集、九州古文化研究会、2015年。
- 12 権香阿「三国時代 金属遺物の 線彫技法 様相—蹴彫技法을 中心으로—」『文物研究』第4号、東아시아文物研究學術財団、2000年。
 - 13 国立春川博物館『権力の 象徴, 冠 慶州에서 江原까지』2008年。国立公州博物館『百済의 冠』2011年など。
 - 14 皇南大塚南墳出土品の調査は2011年11月、2012年9月、2013年12月に国立慶州博物館、2015年2月に国立中央博物館で、福泉洞1号墳の調査は2012年9月に国立金海博物館でそれぞれおこなった。
 - 15 以下、前稿とは(諫早直人・鈴木勉「古墳時代の初期金銅製品生産」(前掲註11))を指す。
 - 16 文化財管理局 文化財研究所『皇南大塚(北墳)』、1985年。文化財管理局 文化財研究所『皇南大塚(南墳)』1993・1994年。
 - 17 皇南大塚南墳の被葬者については、これまでに奈勿王(在位356~402年)説、訥祇王(在位417~458年)説が対峙しており、最近では実聖王(在位402~417年)説も提示されている。(国立中央博物館『黄金의 나라 新羅의 王陵 皇南大塚』2010年)には、各説の代表的論者の最新の見解が示されている。
 - 18 諫早直人「古代東北アジアにおける馬具の製作年代—三燕・高句麗・新羅—」『史林』第91巻第4号、史学研究会、2008年。
 - 19 神谷正弘・李午憲・鄭永東「韓国慶州市皇南大塚出土玉虫装杏葉の復元製作について」『古文化談叢』第51集、九州古文化研究会、2004年。
 - 20 高句麗の事例は6世紀前半に位置づけられる平安南道真坡里1号墳出土玉虫装金具一対のみである(神谷正弘「玉虫装飾品集成」『古文化談叢』第50集(中)、九州古文化研究会、2003年)。
 - 21 たとえば皇南大塚南墳から出土した羽毛形帯冠や鳥翼形冠飾は、高句麗のいわゆる「鳥羽冠」の影響を強く受けたものと考えられている。また北墳からは集安麻線溝1号墳出土例と同型式の太環耳飾が出土している。前者は少なくともその系譜を高句麗に求められ、後者は高句麗からの搬入品の可能性が極めて高い。
 - 22 冠の用語については咸舜變の研究に依拠する(咸舜變『新羅 樹枝形 帯冠의 展開 過程 研究』(慶北大学校大学院碩士学位論文、2012年(金宇大訳「新羅樹枝形帯冠の展開過程研究」『文化財と技術』第5号、工芸文化研究所、2013年))。
 - 23 権香阿「三国時代 金属遺物の 線彫技法 様相」(前掲註12)、第1図。
 - 24 李漢祥『黄金의 나라, 新羅』(前掲註1)、咸舜變『新羅 樹枝形 帯冠의 展開 過程 研究』(前掲註22)など。
 - 25 土屋隆史は表の中で2点の胡籙金具をいずれも双方中円形I a群に分類し、これらと月城路カー13号墳出土例にもとづいて双方中円形I a群を新羅の特徴的な胡籙金具群とみた(土屋隆史「日朝における胡籙金具の展開」『考古学研究』第59巻第1号、考古学研究会、2012年、第1表)。しかし、公表されている資料をみる限り、それを構成する重要な要素である双方中円形金具や方形銙板は出土していない。また、波状列点文の施された金具はいずれも金銅装であるのに対し、無文の逆心葉形銙板や円頭形勾玉状金具は銀装である(第9図)。すなわち報告書掲載資料にもとづく限り、皇南大塚南墳に双方中円形I a群の存在を見いだすことは難しい。
 - 26 皇南大塚南墳には金銅装以外に短冊形吊手金具をもつ銀装の胡籙が存在したと考えるが、現在公表されている破片から具体的なセットを抽出することは難しい。なお胡籙金具の分類にあたっては、土屋隆史氏から多くの教示をえた。
 - 27 蛇尾(第9図-①)については裏面にも鍍金・彫金が施されているが、表裏の彫金に違いを見つ

- けることは難しい（第10図-①・②）。
- 28 第9図-③、10-④の逆心葉形銚板は報告書に記載がないが、(国立中央博物館『黄金의 나라 新羅의 王陵 皇南大塚』(前掲註17))の088に掲載されているため、検討対象に加えた。また、第10図-⑤に報告書図面48-③?として示したのは報告書図版220-1の右上の個体（第9図-④）である。ほかの個体は報告書の図版と図面がおおむね対応するが、本資料のみ図面と見比べると欠損部位などに差異がある。
- 29 皇南大塚南墳の副塚からは轡8点（環板轡3点、鏡板轡5点）、鏡6～7セット、鞍5セット、心葉形杏葉3型式、扁円魚尾形杏葉6型式、歩揺付飾金具8型式など多数の馬具が出土している。
- 30 報告書では玉虫装透彫杏葉は地板が革製とされ、地板が鉄製の本資料は報告されていない。本資料は（国立中央博物館『黄金의 나라 新羅의 王陵 皇南大塚』(前掲註17))の232に該当し、同じつくりのものが複数枚あるようである。
- 31 鈴木勉は技術の水準を「歴史的水準」と「属人的水準」ないし「社会的水準」に区別しており（鈴木勉「古代史における技術移転試論Ⅱ—文化と技術の時空図で捉える四次元的技術移転の実相—」『檀原考古学研究所論集』第十五、八木書店、2008年）、ここでいう技術水準は後者を指す。すなわち蹴り彫りや透彫、鋏留などを基礎技術とする点で、皇南大塚南墳から出土した波状列点文を施す各種金工品は同じ「歴史的水準」の製品とみなせるが、個々の製品をつくった工人の「属人的水準」ないし「社会的水準」には明確な格差が存在する。
- 32 ただし、玉虫装帯金具が玉虫装馬具と同じ工房でつくられたかについては、議論の余地がある。
- 33 権香阿「三国時代 金属遺物の 線彫技法 様相」(前掲註12)、p.130・139・143。
- 34 権香阿「三国時代 金属遺物の 線彫技法 様相」(前掲註12)、第9図。
- 35 権香阿は「蹴り彫りの三角形と三角形の間に鋭い道具で押し引いたような細線」とする（権香阿「三国時代 金属遺物の 線彫技法 様相」(前掲註12)、p.131)。これは筆者らが月岡古墳出土金工品の一部に確認した「三角文と三角文を繋ぐ細線」と同じ加工痕跡であり（諫早直人・鈴木勉「古墳時代の初期金銅製品生産」(前掲註11)、皇南大塚南墳からこの加工痕跡をもつ金工品が出土していることは、日本列島の初期金工品生産の系譜を考えるうえで重要である。
- 36 東亜大学校博物館『東萊福泉洞第一号古墳発掘調査報告』、1970年。
- 37 諫早直人「洛東江 下流域 出土 馬具의 地域性과 그 背景」『慶北大学校 考古人類学科 30 周年 紀念 考古学論叢』慶北大学校出版部、2011年。諫早直人「洛東江下流域における馬具生産の展開とその特質」『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣、2012年。
- 38 咸舜燮『新羅 樹枝形 帶冠의 展開 過程 研究』(前掲註22)。
- 39 権香阿「三国時代 金属遺物の 線彫技法 様相」(前掲註12)、第17図。
- 40 諫早直人「洛東江 下流域 出土 馬具의 地域性과 그 背景」(前掲註37)。諫早直人「洛東江下流域における馬具生産の展開とその特質」(前掲註37)。
- 41 高田貫太「考古学による日朝関係史研究の現状と課題」『考古学研究』第59巻第2号、考古学研究会、2012年。
- 42 福泉洞1号墳出土鹿角装鉄劍の評価については金宇大氏のご教示をえた。
- 43 李熙濬『新羅考古学研究』(前掲註8)など。
- 44 高田貫太は「福泉洞段階の東萊地域は新羅の強い統制下にあったというよりは、洛東江以東地域に慶州を核として形成された政治ネットワーク（広域新羅）に参与しつつ、自らの葬性を選択したり、対外交流活動を盛んにおこなう自立性を有していた」と推定する（高田貫太「考古学による日朝関係史研究の現状と課題」(前掲註41)、p.22)。

신라 초기 금공품의 생산과 유통

諫早 直人 (이사하야 나오토)

요 지 신라의 금공품은 冠이나 大刀 등 기종별로 치밀한 형식학적 연구가 축적되어, 변천이나 제작기법, 지역성 등 많은 것이 밝혀져 왔다. 하지만 각종 금공품이 어떤 식으로 생산되고 유통되어, 최종적으로 피장자의 손에 옮겨지고 부장되었는지에 대해서는 불명확한 점이 많다. 본고에서는 5세기 중엽의 신라왕릉인 경주 황남대총 남분, 그리고 동시기의 지방 수장묘인 부산 복천동 1호분에서 출토된 금공품을 대상으로, 기종을 넘나들며 확인되는 조금기술, 구체적으로는 축조(蹴彫)나 파상열점문(波狀列点文) 등을 관찰하여 신라 초기 금공품의 생산과 유통에 대한 예측을 시도하였다.

우선 황남대총 남분 출토 금공품의 분석에서 조금의 다양성을 파악한 후에, 방대한 금공품의 제작에 관계된 복수의 공방의 존재를 밝혔다. 또한 기술수준이 다른 복수의 공인이 동일 공방에서 협업했을 가능성을 지적하였다. 그리고 복천동 1호분의 분석에서는 신라의 중앙과 지방에서 출토되는 금공품 사이에 엄연한 기술수준의 격차가 존재하는 것, 지방에서는 타 지역의 금공품이 유입되어 복식이나 말장식에 있어 신라왕권의 의도가 반드시 관철된 것만은 아님을 살펴보았다. 마지막으로 과거의 사진이나 실측도에서는 표현되지 않았던 축조, 파상열점문의 개성이나 기술수준의 고저(高低)가, 당해기의 금공품 생산·유통을 해명할 기초자료가 될 것임을 논하였다.

주제어 : 신라, 금공품, 조금, 생산·유통, 황남대총 남분, 복천동 1호분

Production and Circulation of Early Metalwork Goods in Silla

Isahaya Naoto

Abstract: With regard to metal goods of Silla, detailed typological research has accumulated for different types of items such as crowns and swords, with many details having been clarified regarding their changes, techniques of manufacture, and regionality. But there are many points of uncertainty nevertheless regarding how the different types of metal goods were produced, circulated, and finally delivered into the hands of those with whom they were buried as grave goods. This contribution attempts some preliminary observations regarding the production and circulation of early metalwork goods of Silla, taking as object the metal items recovered from the South Tomb of Hwangnamdaechong, Gyeonju, a Silla royal tomb of the middle portion of the fifth century, and a regional chiefly tomb of the same period, Tomb No.1 at Bokcheon-dong, Busan, and making observations on metalworking techniques seen across different types of items, in particular the making of lines with strings of wedge-shaped indentations, and the production of wave-shaped lines of stringed dots.

First, from an analysis of the metal objects recovered from the South Tomb of Hwangnamdaechong, based on an assessment of the variety of carved metal items, the existence was clarified of multiple workshops participating in the production of large amounts of worked metal goods. The possibility was pointed out that several artisans of differing technical skill levels worked cooperatively in the same workshop. Next, from an analysis of the Bokcheon-dong No.1 Tomb, it was seen that a strict gap in the level of technical skill separated items recovered from central Silla versus the outer regions, and that as the latter also received worked items from other regions, personal and equestrian ornaments did not always completely adhere to the designs of the Silla monarchy. Finally, it is argued that the individual characteristics of wedge-shaped indentations and wave-shaped lines of stringed dots, or the greater and lesser levels of technical skill, which were not always captured in prior photographs or scale drawings, should serve as basic data for the clarification of the metalwork production and circulation of the times.

Keywords: Silla, metal carving, production and circulation, South Tomb of Hwangnamdaechong, Bokcheon-dong No.1 Tomb